

# 新島襄没後の同志社の混乱と発展 — 志を継ぐ者たちの奮闘 —

連続シンポジウム「同志社150年の歴史から展望する未来への挑戦」の第3回目として、今回は、新島没後の混乱期（1891～1911）、同志社諸学校の発展（1912～1929）に焦点を当てます。キリスト教社会福祉や国際主義の源流を探ります。

● 日時：2024年9月24日（火）17:00～19:00

● 場所：同志社大学 今出川キャンパス 良心館 RY103  
& Zoom ウェビナー

● 講演：

**木原活信**（同志社大学 副学長、社会学部教授）

**和田喜彦**（キリスト教文化センター所長、経済学部教授）

● 司会：小原克博（同志社大学学長、良心学研究センター長）

● コメンテーター：

**金津和美**（国際教養教育院所長、文学部教授）

**小林丈広**（同志社社史資料センター所長、文学部教授）



■ 問い合わせ 同志社大学 良心学研究センター **CONSCIENCE**

E-mail : rc-csc@mail.doshisha.ac.jp <http://ryoshin.doshisha.ac.jp>

良心を世界に—良心を覚醒させる知の連携と知の実践

## 講師略歴

### ■木原活信（きはら・かつのぶ）

同志社大学社会学部教授。副学長。博士（社会福祉学）。学校法人同志社理事・評議員。専門は福祉思想史・福祉哲学、ソーシャルワーク論。広島女子大学、東京都立大学助教授、トロント大学客員研究員を経て現職。日本社会福祉学会元会長、日本キリスト教社会福祉学会会長。日本学術会議連携会員。社会福祉法人京都基督教福祉会、社会福祉法人イエス団評議員。主著『J.アダムズの社会福祉実践思想の研究』（川島書店 1998、福武直賞）、『対人援助の福祉エートス』（ミネルヴァ書房 2003）、『社会福祉と人権』（ミネルヴァ書房、2014）、『「弱さ」の向こうにあるもの』（いのちのことば社 2015）、『「自殺」をケアするということ』（ミネルヴァ書房、2015）。『ジョージ・ミュラーとキリスト教社会福祉の源泉 — 「天助」の思想と日本への影響—』（教文館、2023）

### ■和田喜彦（わだ・よしひこ）

同志社大学経済学部教授。キリスト教文化センター所長。Ph.D.(学術博士)。専門はエコロジー経済学、戦争と環境、キリスト教と環境。グローバル・フットプリント・ネットワーク/バーモント大学客員研究員等を経て現職。NPO 法人エコロジカル・フットプリント・ジャパン 会長、アントロピー学会元代表世話人、縮小社会研究会理事。著作：国際基督教大学社会科学研究所他編『サステナビリティ変革への加速』（東信堂 2023 共著）。若尾・木戸編著『核と放射線の現代史—開発・被ばく・抵抗』（昭和堂 2021 共著）。John B. Cobb, Jr. et al., eds. *For Our Common Home: Process-Relational Responses to Laudato Si.* (Process Century Press 2015 共著)。『テキストブック環境と公害：経済至上主義から命を育む経済へ』（日本評論社 2007 共著）等。

### ■公開シンポジウム「戦争と同志社——キリスト教主義学校の苦悩と教訓」

（連続シンポジウム「同志社 150 年の歴史から展望する未来への挑戦」第 4 回）

日時：12 月 20 日（金）17:00～19:00

場所：同志社大学 今出川キャンパス 良心館 RY103（予定） & Zoom ウェビナー

講師：小原克博（同志社大学 学長、良心学研究センター長、神学部教授）

司会：中村信博（同志社女子大学 学芸学部 特別任用教授）

コメンテーター：

柿本昭人（同志社大学 副学長、政策学部教授）

穂山洋子（EU キャンパス支援室長、グローバル地域文化学部教授）

詳細は、<https://ryoshin.doshisha.ac.jp/jp/activity/20241220/>

## 新島没後の混乱期（1891～1911）

木原 活信

### はじめに

新島死後の同志社にとっての1891年から1911年という20年間は、単に新島亡きあとの新しい体制への転換というよりは、同志社史においてもキリスト教主義をどのように位置づけるのかをめぐって揺れた時代となった。政府が主導する天皇を中心とした国家体制とキリスト教（宗教）をめぐる衝突がその背後にある。これは同志社だけの話ではなく、それに翻弄された日本のキリスト教系の諸学校の渦中に立たされることとなった。いずれにせよ、この時代に同志社は、キリスト教の位置づけをめぐって、岐路に立たされることとなった。

以下では、これらを、1) 同志社綱領問題について、2) 「訓令12号」による国家とキリスト教の衝突、3) 自由主義神学と同志社、そして最後に4) この影響を直接、間接に受けて、またその反動として形成、胎動された同志社派・キリスト教福祉について議論していきたい。

### 1. 「同志社綱領」削除問題

「同志社綱領」問題の背景には、学内におけるキリスト教の位置づけをめぐる問題があった。直接的には政府のキリスト教への批判があるが、同志社自体にも新神学の影響もあり、同志社はそれに影響を受け、「正統派」としてのキリスト教から「変節」したとして、外国人宣教師や当時のキリスト教界から批判されるような思想的背景もあった。

#### 1-1. 教育勅語

新島の死の前後の1890年代は、これらの舞台の背景となる日本史においても大きな転換期となっていた。大日本帝国憲法が1889（明治22）年に発布され、その翌年、1890（明治23）年10月に教育ニ関スル勅語（以下、教育勅語）が出された。この教育勅語が同志社綱領問題の引き金にもなったが、同志社だけでなく、キリスト教主義学校を追い詰めることとなる。

教育勅語は、天皇は君主であり、国民はその「臣民」であり、「我が臣民はよく忠にはげみよく孝をつくし、国中のすべての者が皆心を一にして代々美風をつくりあげて来た。これは我が国柄の精髓であって、教育の基づくところもまた実にこゝにある」と述べる通り、国民（臣民）は「君主である天皇」に絶対的な忠孝を示し、それに基づき、身近には親孝行などの家族道徳も教えている。そして「万一危急の大事が起つたならば、大義に基づいて勇気をふるひ一身を捧げて皇室国家の為につくせ」と教えた。これこそが、継続的に戦前・戦中の日本の教育の根本理念とされたものである。そして「修身」のみならず全科目がこれを根幹に教育されることとなったのである。

明治となり、近代国家を歩みはじめた日本であったが、大日本帝国憲法に基づき天皇を中心とした国家観に貫かれ、欧化主義とは一線を画すような天皇制国家の教育制度の整備、統制が進展していった。

### 1-2. 小崎弘道らの辞任

同志社では、これらの背景のなか、1896年（明治29）年4月、小崎弘道が社長のとき、同志社は文部省の学校制度に対応する形で同志社尋常中学校を開設した。その学校を政府（文部省）に認可してもらうために、聖書に代えて、政府による「教育勅語」の趣旨に沿った道徳教育を教え、卒業式や入学式でのキリスト教式の宗教儀式を取りやめる事になった。

この影響は同志社内でも小さくなかった。同志社の教育方針である聖書、礼拝、が廃止されたことで、宣教師団であるアメリカン・ボードとの軋轢が決定的となった。そして結果的に1896年の8月に新島襄とともにミッションを抱いて来日していた事実上、宣教師全員が辞任するという前代未聞の事態となってしまった。この混乱とこのこと自体の責任を問われ、小崎弘道は同志社社長を辞任することとなった。同時にその混乱に引責して重鎮であった浮田和民と柏木義円までもが同志社を辞職するという悲劇が起こった。

### 1-3. 「同志社綱領」削除問題（1898）

この混乱の2年後の1898（明治31）年、政府は西洋列強に追いつくべく軍事力の抜本的な強化のために徴兵制を強化・徹底するようになった。原則、若者は徴兵が義務となった。一方で、政府としても国家の発展のために有望な子弟のための教育の重要性は認めており、有力な学校には徴兵猶予の特権を与えてこれを免除した。つまり、教育機関は、徴兵制の猶予をもらうためには政府の方針に従う必要になった。

ところが、同志社ではキリスト教主義学校であるがゆえにその特権が得られずために学内で動揺が走った。この特権がなければ、もはや私学の同志社には優秀な学生が集まらない、ということになる。それでは、深刻な問題が生じるのは避けられない。結果的に経営と教育理念のジレンマが生じ、執行部は苦悩した。徴兵制猶予の特権を得るために、キリスト教主義を維持することは、「踏み絵」のようなものになってしまった。

同志社は、熟考のうえ、当時の社長であった横井時雄(1857-1927)らは、この「踏み絵」を踏んで、教育理念を一部変更するという決定をくださった。その経緯は以下の通りである。同志社綱領の第三条の「本社ハ基督教ヲ以テ徳育ノ基本ト為ス」を外すというのは学内外において、とりわけ教会関係者に対して余りにも露骨な妥協と見られるので、それには手をつけなかった。しかし、横井は、同志社綱領そのものが事実上骨抜きになるような変更を画策した。具体的には、それは「同志社通則」の中の綱領第二条「本社ヲ同志社ト称ス本社ノ設立シタル学校ハ総テ同志社某校ト称シ悉ク通則ヲ適用ス」（『同志社百年史』資料編一、121頁）の条文のなかで「悉ク通則ヲ適用ス」の文言を削除し、また第六条の「本社ノ綱領ハ不易ノ原則ニシテ決シテ動カス可ラズ」という項目も削除した。つまり、対面上は第三条を堅持してキリスト教主義学校の看板は外さないことを一見守っていたようであったが、実際にはそれを否定するような妥協とみられてもしかたなかった。この妥協的な方針変更より同志社は、政府より、徴兵猶予の「特典」を与えられることとなった。

#### 1-4. 「同志社綱領」削除問題の影響 横井ら総辞職

ところが、校友会、組合教会、アメリカン・ボードの宣教師たちは同志社の根幹であるキリスト教教育を軽視し、あまりに国家の時流にすり寄った同志社の執行部の方針に猛反発した。もっとも強く反発したのは新島の同僚であったアメリカン・ボードの宣教師たちであった。とりわけ、宣教師デーヴィスはこれを法廷まで持ち込み、アメリカ公使を巻き込んでの大騒動にまで発展した。組合教会も、留岡幸助が先陣を切って、この決定を厳しく「基督教新聞」

(1898年3月4日)誌上で批判、糾弾した。同志社側からは安部磯雄がこれに反論したが、同志社を退職して安中教会の牧師となっていた柏木義円もこの議論に参戦し、執行部の方針への反対の立場を明確にして「基督教新聞」誌上で安部・柏木論争が展開された。

これにより、同志社は混乱を極めた。結局、この責任をとって校長の横井らは辞職を余儀なくされた。結果的に、一旦、削除した綱領はその翌月に元に戻されることとなった。横井、安部らの執行部側の敗北ということとなった。しかしながら、綱領が元に戻されても、同志社がただちに不利益を被ることはなかった。時の政府は、アメリカ公使ら含めてこれが外交上の問題になることをもっとも恐れていたようで、同志社の徴兵猶予の特典を別に取り消すことはなかった。これらの背景には、大隈重信が仲介したと伝えている(『同志社百年史』資料編一449)。とはいえ、綱領削除に賛成していた横井に続いて安部磯雄、湯浅治郎もその責任をとってこの時に同志社を去ることとなった。

小崎、横井とトップが相次いで辞任、アメリカン・ボードの宣教師団辞任、そして安部、湯浅、浮田、柏木などの有力者も同志社を去るという、キリスト教と同志社をめぐっての混乱は前代未聞の悲劇的状況を示している。

(沖田)【1月5日】 同志社エピソード(40) 横井時雄の綱領削除問題

## 2. 「訓令12号」と同志社 「宗教と教育の衝突」論争の時代

### 2-1. 井上哲次郎「談話」

先述した1890年に出た「教育勅語」を受けて、それを理論的に思想的に擁護する立場で、1891年の文科大学(現東京大学文学部)井上哲次郎教授が「宗教と教育との関係についての談話」を発表した。

この「談話」の背景には教育勅語に際して1891(明治24)年1月9日に起こった内村鑑三の不敬事件がある。第一高等中学校で教育勅語奉読式が挙行されたときに、当時同校で講師をしていた内村が自らのキリスト者としての信念に従い、天皇の親署のある教育勅語に対する「奉拝」を拒んだとされる行為が、教育勅語に基づく「不敬」として扱われ、同職を追われたという歴史上の「事件」である。これ以降、天皇主義者や国粹主義者らによるキリスト教自体への排撃の風潮が世論を喚起して高まった。このような時代背景のなかで井上哲次郎らによって「教育と宗教ノ衝突」論争が引き起こされることとなった。

これをきっかけに、教育界やキリスト教界で大論争が展開されることとなった。同志社では、柏木義円がすぐに井上の談話に反応して批判的な持論を展開した。当然ではあるが、同志社のみならずキリスト教関係者は基本的に挙って井上の論理に反駁した。また当時、「不敬事

件」の最中にあった内村鑑三も当然ながら論陣を張って井上を非難し、本格的な論争となった。関臯作編(1893)

## 2-2. 「訓令第12号」(1899)

大日本帝国憲法(1889)、教育勅語(1890)、不敬事件(1891)、そして井上の談話を受けての言論界の激しい論争(1891)、同志社綱領問題(1898)などの一連のキリスト教と教育に関する混乱に、終止符を打つべく政府としての公式見解を明示する形で、教育界に宗教に関する具体的な指針ともなる重要指針としての法令が出された。これがキリスト教教育にとってはその根幹にかかわる重大なものとなった。

それは、1899(明治32)年8月3日に出示された「文部省訓令十二号」である。その内容は、以下の通りの短い文章である。

文部省訓令第12号 一般ノ教育ヲシテ宗教外ニ特立セシムルノ件

一般ノ教育ヲシテ宗教外ニ特立セシムルハ学政上最必要トス依テ官立公立学校及学科課程ニ関シ法令ノ規定アル学校ニ於テハ課程外タリトモ宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ許ササルヘシ 明治32年8月3日

文科省公式ページ [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/others/detail/1317974.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317974.htm)

これにより、認可されたキリスト教学校における宗教教育および儀式は、事実上、法律により「禁止」されることになった。政府はキリスト教教育を全面的に禁止したのではなく、文部省が公的に認可する学校において、それを禁止したのである。つまり、訓令の「禁止」を破って、キリスト教教育を従来通り儀式等を行う場合には、これまで私立学校の「特典」とされてきた上級学校進学資格および徴兵延期という「特典」をすべて剥奪されて、各種学校扱いとみなされるとする極めて厳しいものであった。これは私立学校にとっては学校運営上、経営上も、致命的なものであった。

そもそも、訓令が出された理由は、間接的には、それ直前に発布された憲法、教育勅語に示された思想が影響を与えているのであるが、もう一つ経緯があった。『同志社100年史』によると、それは1899年7月の条約改正により、当時は許されていなかった外国人の内地雑居の実施に起因しているという(同書457-458)。これによって欧米からの既に来日している宣教師や新たに宣教師が来日し、日本人と雑居し、伝道とその関連の学校教育が加速的に発展していくと政府が「恐れ」たからである。すでに教育勅語を中心とする天皇制国家の教育方針が欧米から来た外国人宣教師たちによって混乱させられるのではないかとすることを時の政府は異常なまでに恐れていたのであろう(同書457-458)。

つまり、この文部省訓令十二号はキリスト教が国に流布して、それが宗教や文化に浸透する展開になることに対する政府としての事前の防御策であり、そのための法制上の備えであったといえる。つまりミッション系の根幹にあるキリスト教主義の教育というものを放棄させ、それを事実上骨抜きにし、文部省の統括のもとに、天皇国家の体制下に私立学校を組み入れようとしたものであった。

### 2-3. キリスト教系学校の抵抗

この時点で、同志社と同じくミッション系の学校であった青山学院、明治学院などのキリスト教学校から、相次いで抗議と異議が申し立てられた。関西学院大学、青山学院、明治学院は、明確な「抵抗」を示した。また、ミッション系の各学校は密接な連絡を取り合い、「特典」を捨てても、キリスト教教育を守ることに徹した。こうした努力もあり、本多庸一（青山学院長）、井深樞之助（明治学院長）などが文部省に訓令の撤回や適用除外の運動をし続けた結果、1901年（明34）5月、前述の上級学校への進学・徴兵猶予等の特典を回復することができた。これらのキリスト教主義学校の共闘と連帯は、後にキリスト教教育同盟の発起の起点ともなるキリスト教学校の連携がここではじまることとなる。

それぞれのキリスト教系の学校の対応は微妙に分かれたようであるが、もっとも抵抗を示した青山学院においてさえも、記録によると実際は内部では紛糾していたようである。青山学院大学の公式ホームページでも、この点を明示しているが、それによると、外国人理事（宣教師団）たちは、これを「踏み絵」とみて、キリスト教を護持し、この「踏み絵」は絶対に踏まずに自らの信仰を堅持して、国に認可された学校である特権を放棄して各種学校となる道を模索、選択しようとしていたようである。しかし当時の日本人の理事たちは、それでは青山という学校の衰退、崩壊につながるということが目に見えたため、外国人理事の意見に難色を示した。青山学院の当時の理事会記録が関東大震災等により消失しているため、このあたりの正確な経緯は分からないとはいえ、「理事会としては、年度中は、一時宗教教育をやめ、中学校を維持して最上級生を卒業させ、翌年度からは、断然特典を返上し、各種学校となってもキリスト教教育を堅持することを決定」ということである。

いずれにせよ、キリスト教主義学校の代表者たちは、基本的に挙って抗議活動を行い、明治学院総理の井深樞之助氏と、青山学院院長の本多庸一は、山縣有朋首相や樺山資紀文部大臣らに陳情・請願運動を行ったとされる。しかし、キリスト教の宗教教育の禁止そのものが覆ることとはなく（1945年の終戦まで続く）、上級学校への進学資格の無い、徴兵猶予の特典も無い学校に、学生・生徒は集まらず、退学者も出て、学校の存続さえも危ぶまれる事態となった。キリスト教教育の中止の道を選ぶ学校もあった。

### 2-4. 同志社の反応

先述した通り、同志社中学の礼拝、聖書教育の廃止、同志社綱領問題で、小崎、横井らの辞任に追い込まれた苦い経験を経ていた同志社であった。しかし、この「訓令12号」問題は再びこの問題が再燃し、キリスト教と教育という問題に直面し、深刻な影響を与え学校の存廃まで考えざるを得ないほど動揺することとなった。土肥によると「これは政府が政教分離の美名にかくれて、とくにキリスト教主義学校の教育を阻止しようとした試み」（土肥昭夫

（1968:5）であったことが事実であるならば、国家による巧妙な「罨」のようなものであり、思想的には国家とキリスト教の衝突であった。この「訓令」に従わなければ文部省より認可を取り消され、各種学校扱いとなる。そうすると、徴兵猶予の特権も上級学校受験資格もなくなり、学校には生徒が集まらず事実上学校は成り立たなくなる。一方で従来通り、礼拝や聖書を教えないとなれば、キリスト教主義学校を止めた「棄教」のレッテルを貼られることにな

るというジレンマに立たされたのである。それは学校運営という意味では、経営と教育の板挟みであったともいえる。

明治学院の井深は「訓令」に従わず、中学校を廃止して普通学部をつくり、ここで従来のキリスト教教育を行いつつも実質的に高度な教育を行い、それを2年かけて文部省に認めさせ実質的な回復をさせるという現実的な対応をしたとされている。いわゆる日本のキリスト教界で明治学院の井深の名を高めた態度として歴史にも記録されている。井深日記によれば、「同志社は、訓令を順守して中学校を継続した」とされているようだが、実際は、『同志社90年史』によれば、1900（明治33）年2月に普通学校をつくって、明治学院と同じような方法で、その権利を回復したとされている。このあたりの真偽と経緯はよく深層がわからない面があるが、その事実は別として井深の日記の記載にあるのは、共闘してキリスト教主義として闘う際に、青山や関学などとは違って、同志社がどちらかという及び腰だったことの証左なのか、あるいは先の同志社綱領問題にある同志社のキリスト教主義に対する不信感が既に同じキリスト教系の学校内でも共有されてあったものなのか定かではない。『同志社100年史』では、明治学院、青山、立教、などは外国の教派の資本によって運営される「ミッション・スクール」であるゆえに、外国人宣教師団の意向が強く、「訓令」への真っ向からの反対となったと説明している（459-461）。この点、同志社は、先述したようにアメリカン・ボードの宣教師団と既に「決別」し、そこから日本人によるキリスト教学校として「自立」「独立」していたので、この訓令問題に「どのように判断し、困難な状況をきりひらいていくかは、同志社だけがとりくむことの出来た先駆的課題であった。しかしこの決議とその後の経過を見る限り、そのような兆候はみられず、結局他の学校がきりひらいた成果にあずかることしか出来なかった」（461）と評価されている通り、「まことに巧妙というか、安直というか、ソツのない決議」（461）をしたのである。

関西学院は、平松一夫理事長の言葉のなかで、当時の「訓令12号」に正面から対峙したことが今日の大学の礎であることを誇らしく語っている。以下は、学院長の言葉として公式ページからの引用である。「関西学院では、吉岡美国第2代院長の「聖書と礼拝なくして学院なし。特典便宜何ものぞ。たとえ全生徒を失うもまたやむを得ざるなり。」という力強い方針により、キリスト教主義教育が堅持されたのでした。」

関西学院大学公式ページ <https://www.kwansei.ac.jp/news/detail/4163>

### 3. 新神学の同志社への影響と山室軍平

#### 3-1. 新神学とは何か

同志社綱領問題、井上談話、訓令12号への対応等についていわば外圧としての同志社学内での動揺について議論してきたが、もう一つおさえておかなければならない点は、同志社内部、あるいは神学内部の議論である。政治動向や外圧を同志社がどのように受けとめてきたのかに専ら関心が集中するが、実はこの時代、同志社のみならず日本の神学においても激震が走っていたのである。それは欧米で議論されていた新神学の影響である。新島亡きあとの同志社は真っ先にそれを受け入れ、日本の神学界にも論争が起こっていた。宣教師との軋轢についても、ここにその背景にある。

新神学の定義にも幅があるが、当時もっとも議論の的となったのは、伝統的なキリスト教（プロテスタント）や教会が保持してきた聖書の伝統的解釈を否定し、聖書の記述を脱構築し、たとえば天地創造の記述、福音書に記されているイエスの奇跡、復活、などを字句通りではなく、一つの象徴として理解することに特徴がある。また歴史上の人間イエスに焦点を充てるということにも特徴があった。これは海老名弾正などに代表されるが、人間イエスの強調によりユニテリアンの発想につながっていく。後に海老名弾正と植村正久の神学論争などもこれに起因する。これは、単なる宗派の教理や特性ということを超えて、正統的なキリスト教と分水嶺としても位置付けられてしまい、欧米の宣教師団の反発にもみられるように伝統的な教会からは厳しい批判を浴びせられることになった。（和田洋一編(1965)『同志社の思想家たち』）

ここでは、神学的論争の内容そのものにはこれ以上踏み込まずに、この新神学が同志社にどのような影響を及ぼしたのかについて、議論していきたい。その一つの例証としてケーススタディ的に「典型的な同志社人」、あるいはその「本流」と言われた山室軍平を例にして、その詳細をみていきたい。結論的に言えば、山室は、新神学に批判的で、それに対立する。山室は、石井十次、留岡幸助らと並んで日本の三大社会事業家の一人と評価され、またキリスト教界では日本を代表する伝道者（説教者）の一人とも称された人物である。山室の言説から新神学と当時の同志社について議論していきたい。結果的に、これが同志社派としての社会福祉の誕生の原動力の一つへと展開していくことになる。

### 3-2. 「同志社の本流」

当時の同志社の中心人物であり、後に早稻田の教授となった安部磯雄は、山室軍平を評して次のように述べた。

何といっても同志社の伝統的精神を以て、世に立ってゐるのは山室中将である。中将は本流を継いで来たが私共は支流である。中将は本家で、私共は分家である。本当の同志社ッ子といふのは、山室中将である（「ときのこゑ」871号 1932年7月15日）。

安部は山室軍平こそが「同志社の本流」であり新島の継承者であると評価する。同志社大学のクラーク館2階には、山室を記念して「神ト人道ノ為ニ」と銘打ったタブレットが飾られているが、このタブレットは、同志社創設者の一人宣教師デーヴィス（Jerome Dean Davis, 1838-1910）の息子ジェローム（Jerome Davis）の寄付記念に際して設置されたものだが、その設置の趣旨が当時の「同志社出身者中最大なる人物」を記念するというものであった。つまり、当時において山室が「同志社出身者中最大なる人物」と評価された人物であることを客観的に示すものである。

そう考えると、山室が「同志社の本流、同志社の良心」「同志社出身者中最大なる人物」ということだが、彼と同志社との関わりには複雑な謎がある。同志社社史資料編集所編「同志社九十年小史」（1965）の記述によると、山室は「苦難を乗り越えて卒業した」（558頁）となっているがこれは事実ではない。最終的には退学している。それでは、何故に憧れた同志社を半ばで退学せねばならなかったのか。以下では更にその経緯を考えてみたい。

### 3-3. 同志社時代の山室軍平

#### (1) 同志社入学の経緯

まず、山室の同志社の入学の経緯を整理しておきたい。「ただ今京都に新島襄という先生がおられ、わたくしどもがそのそばに行き、何でもよいから三十分ほどお話しして帰ると、あと一週間くらい、何となく気がすがすがしたように感じる」(山室 1929: 40)と、徳富蘇峰(1863-1957)が東京の福音教会の青年会で演説に以下のように触発された。

わたくしは、それを聞いて非常に感動したのである。格別に現在の日本に、新島襄氏のような生きた人格者がおられることを知って、もはや矢もたてもたまらなくなり、どんなにしてもその人のもとに行き、その高貴な品行の感化を受けずにはいられないと、熱切に希望するに至ったのである。(山室 1929: 40-41)

山室にとって、経済的余裕は全くなかったが、この時、英国のブリストルの孤児院創設者であり、独立伝道者であったジョージ・ミュラー(George Müller, 1805-1898)が同志社で行ったときに新島襄らにより刊行された一冊の「小冊子」と出会う。ミュラーの言う「人が神に願うことは、御心ならばかならず答えられん」という「単純な信仰」に山室は自ら覚醒させられたと述懐する。

わたしはそれを一読して感激に耐えず、ぜひ一冊手に入れたいと思ったが、それを買う金を持たないので、小冊子を借りて帰って手書きし、それ以来毎日数回それを読んで神に祈り、また読んで神に祈り、少なくとも百回か百五十回くらいは熟読して神に祈っている間に、わたくしの胸のうちにはいつしか、「ミュラーを助ける神は、またわたくしを助ける神だ。わたくしはこのミュラーの神に頼って大胆に京都にいこう」との相当に強い信仰がわいて来るようになったのである。(山室 1929: 42)

彼は晩年にこの小冊子を自ら復刻、編纂していることから生涯にわたってミュラーに入れ込んでいたのかがわかる。そして、小冊子の「進言」により、同志社の夏期学校に行き、新島と初めて出会う。残念ながら当時新島は、体調を崩し、この夏期学校にも「しばしば集会には顔を出されたが、口を開いて物を言われたのは、ただ一回だけで、それさえほんの十分か、十五分間、感想を述べられたに過ぎなかった」(山室 1929: 44)が、「その言われたことはきわめて単純であったが、それが神を愛し国を思う赤心からほとばしり出たのであるから、聞く者に最も深い感化を及ぼしたことは、さらに不思議もなかったのである」(山室 1929: 44-45)と述懐している。この夏期学校終了後に同志社の学生となった。

#### (2) 新島襄の死

1890年1月23日に新島襄が死去したが、結局、新島と十分には対話できなかった。しかし一つの励ましの言葉を受けたと述懐している。

新島先生が相州大磯で四十八歳（原文ママ）の荘齡をもって世を去られたのは、明治23年1月23日のことであった。わたくしはその一年ほど前に、徳富氏から先生の高徳のことをうけたまわり、その高風に接したいばかりに同志社に入学したのである。ところが先生はそのころ、はや非常に健康を害しておられたのと、また一つには同志社大学設立の運動が多忙であったのと、二つの理由によって、少しも学校には出られなかった。ただ一度吉田君（筆者補注：吉田清太郎のこと）が先生を訪問し、わたくしのことについて話してくれた時、先生は君にむかい、「どうかその青年に、まだ若いから、しっかりやれと伝言してください」と、言われたそうである。これは先生が特にわたくしのために語られた唯一の金言として、わたくしはありがたくそれを拝承し、現にそれから四十年を経た今日もなお、それを「まだ未熟だから、しっかりやれ」という意味に解して、先生の忠告を重んじたいと、心がけている次第である。

わたくしは新島先生の死去に接して、一時非常に力を落とした。けれどもまた考えてみれば、先生を起したもうた神は、生きていますのである。わたくしどもはその神によって自分を励まし、及ばずながらまたおのおの先生の精神と人格とにあやかるところがなくってはならない。（山室1929：55-56）

折しも日本のキリスト教神学界にも自由主義神学が入ってきていた。その影響を早く受けたのは同志社であった。新島の死後の翌年、すなわち1891年に同志社の後継者と目された金森通倫は「日本現今の基督教並に将来の基督教」の論文を著し、自由主義神学転向の宣言をした。横井時雄らも自由主義神学を主導した。またアメリカン・ボードを激震させた小崎弘道の宣教師批判の発言も1893年のことであった。つまり、新島亡き後の同志社で、多くの学生とともに山室はこのような雰囲気の中で学んでいたのである。山室はこの当時の事を赤裸々にこう証言している。

明治二十三、四年ころから、日本にユニテリアンだの、宇宙神教(ユニバーサリズム)だの、またはドイツ神学だのというものが、ほとんど一時に来入し、それまできわめて単純に、いわゆる正統派の信仰を守って安心していた日本のクリスチャンを驚かした。そのうち金森通倫、横井時雄などの諸先輩が、古い信仰を捨てて新神学に走り、はては伝道界を去られるような事件も起きて、日本のキリスト教会は一時大きな危機に襲われたのである。

その当時のわたくしなどはもとより、込み入った神学説を理解する力など持たなかったが、それにしても、どうせ一生、宗教に身を献げようと決心する者であるから、わかっても、わからなくても、そうした方面の書籍や雑誌など、手当たり次第に乱読し、またしきりにそれらの題目に関する演説、説教等を聞く間に、最初の単純な植えつけられたままの信仰は、きれいに破壊されてしまった。もはやキリストの神性も、その奇跡も、十字架も、復活もわからなくなって、神は以前のようになつかしい愛の父上ではなく、かえって正義の審判者か何かのように感じられ、キリストの仲保者としてのみわざは見失って、今はただ堅苦しい教師か、または人格の模範とだけ見えるようになり、前には響きが声に応じるように聞かれた祈りも、今は空に向かって物を言うように思われだした。こうしてわたくしの心の平和は消え失せ、霊の生命は全くかわききったのである。（山室1929：101-102,下線筆者）

「明治二十三、四年」（1890～1891）というのは新島の死とその直後の年とも重なり、この山室の発言は当時の同志社の雰囲気を知る上において貴重な発言である。それによると、その時に同志社内部において神学上の転換があったとう。むろん、これらの兆候は、それ以前か

らも燻っていたが新島や宣教師のもとにコントロールされていた。しかし山室の記述からすると、新島死後、新神学の影響が「同志社全体」を覆ったという。当時の同志社は、現在とは違い、宗教（信仰）が大きな位置を占めていた時代であったので、神学上の変遷はストレートにそのまま学風にも影響を及ぼした。

山室自身は、新島亡き後に同志社内に伝統的神学への反動を感じ、新神学が基軸になったと否定的に捉えていた。このように、急速に変化するようにみえた当時の同志社に山室は失望していく。彼が同志社に期待していた学びは崩れ去り、迷いの学生生活に苦闘した。同時に慢性の「貧困病」も、実際深刻になってきたようで苦学は深刻になり、彼は食べるにも困っていたようである。以下に述べる通りである。

こうしてわたくしは思想上、信仰上、容易でないうず巻きの中に巻きこまれると同時に、物質上にはまた、学資の不足から来る困難のためにいろいろ苦心していたのである。ある年などは、毎月金二円で食事も、書籍も、日用品も、一切を支弁せねばならないことが半年も続いたので、その年の正月から六月まで、飯は食ったけれども、一切副食物を食べず、ただ塩だけなめていたのである。（山室 1929：104）

### （3）同志社中退の経緯

かくして山室軍平は 1894 年 6 月に同志社を中退した。

わたくしは明治二十七年六月に、同志社を飛び出した。卒業したのではない、いいくらいで飛び出したのである。その当時のわたくしは靈魂が衰え、肉体が弱り、勉強にもあまり身が入らなくなって、それでも「神と平民とのため」との初一念だけは、おぼつかないながら残っていたから、いっそ今のうちに学校をやめて、直接伝道にでも従事したら、その方がもっと明るく、もっと希望のある道に出られるかもしれないと、適当なところで学校生活に見切りをつけ、備中高梁に帰り、ほとんど強制的にそこの教会の伝道師として雇ってもらったのである。（山室 1929：105）

更に、彼が在学時に記した重要な論文である「完伝道者」で、日本のキリスト教界は腐敗しきっており、殊にその指導者を、以下のように激しく批判する。

優柔不断日々に空漠ナル儀文ニ拘泥シ、迷妄ナル卑見ヲ伝説シ、徳ナク量ナク叨ニ奇怪ノ語ヲ弄シ、識ナク信ナク徒ラニ習タ儘ヲ受買シ、外人ヲ動カスノ能力ナク、内神ニ迫ルノ至誠ナシ、然カモ且ツ人ヲ罵リテハ罪人ト呼ビ自ラ許シテ神ノ子トナシ …中略… 時アリテ塩其味ヲ失ヘルモノ、如ク…（山室 1892:16-17）（旧字体は、新字体に改め、適宜、句読点を打った）

新島襄の死後 2 年後の 1892 年に学内で発表されたこの論文は、当時の同志社への警告とも判断される。彼はこの論文「完伝道者」のなかでこう結論づける。「基督教会ハ今ヤ天地ノ粹ヲ集メ宇宙ノ美ヲ吸ヒ千古ノ俊ニ学ビ当世ノ急務ニ応スル基督的眞箇偉大ノ完伝道者ヲ待ツヤ極テ切ナリ」。この偉大な「完伝道者」というイメージこそ、同志社を中退して、救世軍の伝道者となる山室自身と重なる。これを執筆後 1894 年に山室は同志社を卒業することなく「いいくらいで、飛び出した」。

1894年に山室はあれほど憧れた同志社を「いいくらいで、飛び出した」のであるが、熱烈な信仰を抱いて、伝道者となり、そして彼らの困窮を助ける社会事業家として献身した。先に提示した安部磯雄の「山室軍平こそ、同志社の本流・本家」が客観的な正しい評価であるとするなら、その「本家」の山室がこのキャンパスを飛び出したということは、皮肉な結果になってしまった。山室の同志社時代は濃密な5年間であり、波乱万丈であったが、結局、同志社を飛び出して、日本の社会事業の草分けとなる救世軍へと向かうことになる。山室のこの葛藤を通して、同志社内部での新神学の状況やその影響をケーススタディ的に読み取ることができると。一方で別の見方からすると、この神学上の混乱が山室が同志社を飛び出し、社会の底辺へ向かっていく助走となり、反動ではあるが「同志社派」とも言われるキリスト教社会福祉の源流の起点となったとも言える。

### むすび

以上、述べてきたように、新島死後20年間は、「キリスト教主義」をどのように位置づけるのかをめぐって激しい論争がなされた時代となった。山室軍平の葛藤はその典型的な例である。

キリスト教神学内部の問題としての自由主義神学の到来と、天皇を中心とした国家体制とキリスト教（宗教）をめぐる衝突が露呈した時とも重なる。このような背景をもとに、「同志社綱領問題」、「訓令12号」による国家とキリスト教の衝突が露呈したが、結果的にこの影響の反動として形成、胎動された同志社派としてのキリスト教福祉は誕生していくことになった。

そしてこのような混乱期であった1907年に、新島のもう一人の弟子で、神戸教会の牧師であった原田助が、同志社の復興を掲げ、その再建のため社長に迎えられた。原田はこの混乱を修めるべく、1911年に悲願であった大学設立を成し遂げて初代学長になり、1919年に辞任するまで12年の長きにわたりリードした。原田の評価と功績は、本章の年代の範囲を超え、次章でその詳細は述べられることになるが、その「予告」として一言述べるならば、この時代の新島亡きあとのキリスト教主義の同志社内部での混乱を治め、同志社を復権させ、大学設立に漕ぎつけた意義は大きい。原田は同志社の混乱期には、シカゴ神学校、イエール大学に留学しており、帰国後も3つの教会の牧師を務め、直接同志社にはかかわってこなかった。これがむしろ、いわば「隠し玉」的、あるいは第三者的存在として寄与できた要因なのかもしれない。後にハワイ大学教授になるなど原田は、同志社のキリスト教に基づく国際主義をもたらした先駆者である。また設立の旨意を式典で読み上げる習慣も原田の提案によりはじまったことである。

このように、混乱した同志社は、そのキリスト教のエネルギーが外に向かい、同志社派という社会福祉の源流を生み出し、内部的には原田による同志社の復権となって大学設立へと向かっていくのである。

### 参考文献

秋元巳太郎（1983）『山室軍平の生涯』（改訂版）（救世軍出版供給部）

安部磯雄、鏝田研一（1934）『伝記小説賀川豊彦』  
土肥昭夫（1968）「同志社教育と国家の問題」『同志社時報』  
同志社社史史料編集所編（1965）『同志社九十年小史』  
同志社大学人文科学研究所編（1991）『山室軍平の研究』同朋社  
学校法人同志社『同志社百年史』資料編一  
石塚正治編（1890）『新島先生言行録』大阪福音社  
関西学院大学公式ページ <https://www.kwansei.ac.jp/news/detail/4163>  
木原活信（1993）「同志社のアイロニー —山室軍平の中途退学—」（同志社新島研究会『新島研究』82号139-162）  
木原活信（2023）『ジョージ・ミュラーとキリスト教社会福祉の源泉 —「天助」の思想と日本への影響—』教文館  
「基督教新聞」（1898年3月4日）  
救世軍（1932）「ときのこゑ」871号1932年7月15日  
新島全集編集委員会編『新島襄全集』第4巻  
三吉明（1971）「山室軍平」吉川弘文館  
本井康博（1991）「山室軍平の教会活動—救世軍への助走—」同志社大学人文科学研究所編『山室軍平の研究』同朋舎  
文科省公式ページ [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/others/detail/1317974.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317974.htm)  
高道基（1973）『山室軍平』日本基督教団出版局  
竹中正夫（1987）「原田助」『同志社人物誌』60  
関臯作編（1893）『井上博士と基督教徒』みすず書房  
杉井六郎（1991）「同志社時代の山室軍平」同志社大学人文科学研究所編『山室軍平の研究』同朋舎  
山室武甫（1980）『平民の使徒山室軍平』福音宣教会  
山室軍兵\*（1890）「新島先生ヲ吊フノ文」『同志社文学会雑誌』第31号  
山室軍兵\*（1895年7月28日付）「福西しげ子、横屋幸完、横屋姉への手紙」（山室軍平選集刊行会編（1956）『山室軍平選書第十巻書簡集』9-16頁）  
山室軍兵\*（1892）「完伝道者」『同志社文学会雑誌』第51号  
山室軍平（1929）『私の青年時代』救世軍出版供給部 本稿は1984年版から引用  
山室軍平編（1935）「信仰の生涯 ジョージ・ミュラー氏小傳并演説」不二屋書房  
良心学研究センター（2019）『新島襄365』沖田行司1月5日 同志社エピソード(40)「横井時雄の綱領削除問題」  
和田洋一編（1965）『同志社の思想家たち』同志社大学生協出版部

## 同志社諸学校の発展（1912～1929）

和田 喜彦

### はじめに

新島没後の20年間（1891年から1911年）は、キリスト教主義を掲げる他の学校法人と同じく、同志社は明治政府による天皇を中心とする国家観とキリスト教主義の矛盾を抱え込むことになり混迷の中にあつた。しかし、時代の雰囲気は、明治末期から大正時代へ、そして昭和初期にかけて徐々に変化が見られた。いわゆる「大正デモクラシー」の到来である。都市のホワイトカラーや労働者たち、いわゆる「民衆」が、日本の政治を藩閥政権から取り返し、普通選挙を実現しようとする運動である。

本稿では、このような時代背景を概観しつつ1912（明治45/大正元）年～1929（昭和4）年の18年間の同志社の特徴を観察していく。この18年間は、同志社諸学校が発展した良き時代であつた。1912年には専門学校令による同志社大学の設立が認められた。同時に同志社女子部も同志社女学校専門学部となった。1920（大正9）年には、同志社大学は大学令による大学に昇格した。国際主義が始動し、男女共学が制度として整備された。

この時代の同志社の舵取りを託されたのは第7代社長/総長の原田助と第8代総長の海老名弾正であつた。二人とも熊本バンドの流れを引き継ぐ者たちであつた。

以下では、1. 大正デモクラシーを概観し、2. 原田助総長の後半の時代、3. 海老名弾正総長の時代にわけて議論していきたい。

### 1. 大正デモクラシーと同志社

明治末期から大正昭和初期にかけて、明治維新を成し遂げた勢力を中心とする藩閥政治への民衆の不满が膨れ上がり、民衆を中心とする民本主義の政治体制を構築しようとする機運が高まっていく時代となった。大正デモクラシー」の時代である。一般「民衆」が、デモクラシー運動の主演となって、普通選挙を実現しようとしたのである。

時代的な背景は以下の通り。明治維新以降の富国強兵・殖産興業の掛け声のもと、近代的な資本主義体制が整うにつれ、劣悪な労働条件・労働環境の問題が深刻化していった。問題の解決のために1897（明治30）年、片山潜らが、「労働組合期成会」を結成し、労働組合の考え方とともに「社会主義思想」も一般に紹介されるようになった。

日露戦争（1904（明治37）年～1905（明治38）年）後のポーツマス講和会議（同年8月10日～9月5日）において、戦勝国にもかかわらず日本は賠償金を得ることができず、戦争犠牲者の遺族や戦費拡大に伴う増税に苦しんだ大衆が不満を抱いた。さらに、第一次世界大戦開始（1914（大正3）年）を背景にした米価の高騰、長州閥で陸軍出身の寺内正毅内閣が1918（大正7）年、シベリア出兵を宣言したことにより、一般民衆の不安は頂点に達し、富山県を皮切りに全国的な米騒動が発生した。

熊本バンドの一員であつた海老名弾正は、同志社英学校卒業後、安中教会、本郷教会で牧会を行ったが本郷教会には、東京大学の学生や教職員が多数礼拝に参加した。その中でも吉野作造は特別であつた。吉野は、仙台において1898（明治31）年にアメリカ人宣教師・ミス・ブ

ゼルより洗礼を受けた。東京帝国大学に進んでから、本郷教会に通い、海老名弾正の説教に感化され、信仰を深めていった。

その吉野作造は、大正デモクラシーの提唱者であり中心的人物であった。吉野は、キリスト教の人格主義を基礎とし、民本主義を唱えていった。デモクラシーの語義を主権在民（民主主義）と民生向上（一般民衆生活の向上）及び民本主義（天皇君主制による民主主義）に分け、そのうち民生向上と民本主義を「普通選挙と政党内閣制によって実現せよ」と説いた。

海老名弾正と吉野作造はお互いに影響を与え合って、大正デモクラシーの機運を牽引していった。熊本バンドが、同志社英学校の教育の質を高め、同志社英学校卒の牧師が大正デモクラシーの担い手を育んだことは新島襄はおおいに喜んでいるに違いない。

## 2. 原田助（第7代社長・総長）の後半の同志社

### 2-1. 原田助の生い立ちと同志社総長就任前の経歴

原田助は、1907（明治40）年に同志社第7代社長（のちに総長）として就任し、1919（大正8）年に辞任するまでの12年間にわたって同志社の再建のために奮闘した。就任にあたって、原田は、「自らの不肖不徳を顧みるに違あらず、知己の言に感じ敢えて天命を信じ其言に従はむのみ。十年の命を縮むるの覚悟」書いている（原田健。1971『原田助遺集』155頁。）。

原田助は、父鎌田収と母亀尾の次男として1863（文久3）年11月10日熊本市坪井町に生れた。1882（明治15）年に原田林平の養子となり、原田姓に改名した（当時19歳）。当時長男は徴兵から免除されることになっていた。次男であった助が徴兵を免れ、勉学を続けるための形式的な養子縁組であった。

1874（明治7）年（10歳 or 11歳）から熊本洋学校において、L.L. ジェーンズの厳しい薫陶を受け、自然科学などの科目を学んだ。ジェーンズは学生たちが英語を十分理解できるころを見計らってキリスト教についても自宅で非公式に教え始めたが、その強い感化を受けた小崎弘道や海老名弾正ら35名がキリスト教を信じるに至った。彼らはその決意を表明するために、1876（明治9）年1月30日熊本市花岡山山頂付近で「奉教趣意書」を読み上げ署名した。キリスト教徒を輩出したということが知れ渡り大きな問題となり、熊本洋学校が同年に廃校となってしまった。行き場を失ったジェーンズの弟子たち約40名は京都にて創立2年目を迎えたばかりの同志社英学校に転校していった。宮川経輝、海老名弾正（同志社第8代総長）、下村孝太郎（第6代社長）、小崎弘道（第2代社長）、徳富蘇峰らであるが、彼らは、勉強熱心で聡明で活気溢れる青年たちであった。設備、制度、カリキュラム、教員、生徒など多くの点で未整備であった同志社について、彼らは失望し、転校を考えてジェーンズに相談した。ジェーンズは、不満があるのなら自分たちの力で改革せよと命じた。彼らはカリキュラムや規則などについて改善提案を新島校長に提示し、新島もできる限り彼らの要求を実現しようと努力した。このプロセスを通じ、彼らと新島の信頼関係は強固となっていった。彼らは、結果的に同志社教育の質を格段に引き上げる貢献をした。後に彼らは宣教師たちによって「熊本バンド」と呼ばれるようになった。

原田助は京都には行かず、熊本に残り、1878（明治11）年に嘉悦氏房が新設した熊本広取英知学校に学び、1879（明治12）年に第一回生として卒業した。翌年1880（明治13）年（当時16歳）、京都に移転し、熊本洋学校の先輩たちの何人かが残っている同志社英学校にて

学び始めた。新島襄と宣教師、先輩教師らの指導をうけることでキリスト教に対する関心を深くし、1881（明治14）年5月1日、ゴードン宣教師より洗礼を受けた（当時17歳）。同志社在学中、D. W. ラーネットの日本語教師も務め月給3円を受領していた（竹中正夫(1987)「同志社人物誌（60）原田助」『同志社時報』第83号。）

同志社英学校在学中に原田助の同級生たちには傑出した人物が多数おり、後に哲学者として活躍した大西祝（はじめ）とは親しかったようで、人間の品性(moral dignity, moral character)を高めることの重要性を話しあっていた。

同志社英学校を卒業した翌年1885（明治18）年、神戸教会の牧師となり、1888（明治21）年に米国留学に出かけるまで牧会を続けた。1886（明治19）年8月には弱冠23歳で神戸基督教青年会の初代会長に就任している。

1888（明治21）年より3年間、シカゴ神学校、イエール大学に学んで1891年イエール大学よりB.D.（神学士）の学位を得て帰国した。

帰国後の12月には、婚約者の川本佐喜子と結婚し、東京都千代田区にある番町教会（1892年～1895年）、京都市北区にある平安教会（1896年～1898年）にて牧師として務めた。原田は番町教会の牧会に当たりながら、『基督教新聞』、『六合雑誌』の編集を手伝った。

その後、留学前に牧師として在職していた神戸教会（1898年～1906年）に戻って牧会を再開した。原田の国際的な性格と神戸の国際性がマッチして教会は着実に成長していった。神戸教会では、『教会月報』を発行し、教会員相互の交流を促進した。

神戸時代の1900（明治33）年には、万国共励会会長F. E. クラークを神戸に招聘し、日本連合共励会第8回大会を開催した。同年ロンドンで開催された万国共励会大会にも出席。1905（明治38）年には中国、朝鮮にて講演旅行を行い、翌年にはインド基督教青年会同盟の招きで2月～5月までインド各地で講演して回った。インド各地での聴衆総数は3万人を超えており、大きな反響を呼んだようである。竹中正夫(1987)「同志社人物誌（60）原田助」『同志社時報』第83号。pp. 92-93.

同志社が混迷から脱する策として、国際的にも知名度が高く人望が厚い神戸教会牧師の原田に社長に就任してもらうとする具体的な案が理事会などで話し合われ始めたのは、1901（明治34）年の年頭のようである。

## 2-2. 同志社第7代社長・総長（1907～1919）としての原田助の功績

### （1）専門学校令による大学設立

原田助が第7代社長（のちに総長）に就任したのが1907年1月であった。その年の創立記念日である11月29日の創立記念礼拝において、「同志社大学設立の旨意」を抜粋して読むこととした。建学（立学）の精神を再確認し、新島襄の「大学設立の旨意」の実現のため、一致協力して事に当たるように呼び掛けたのである。大学昇格への布石を打ったのである。「大学設立旨意」抜粋は現在も創立記念礼拝で朗読されているが、原田が1907年に始めたことであった。

現在では、創立記念礼拝だけでなく、春学期入学式においても「同志社大学設立の旨意」は朗読されている。数年前までは創立記念礼拝と入学式の抜粋に微妙な差異があったが現在では統一されている。ちなみに秋学期入学式では抜粋朗読が欠落している。不思議であり、かつ残

念でもある。

就任5年後の1912（明治45）年に専門学校令により同志社大学の設立が認可された。同時に同志社女子部も同志社女学校専門学部となった。新島の長年の宿志であった大学設立の夢を実現したのである。

### （2）学校経営規模拡大と学生数の増加

学校の経営規模も学生数も原田助の在任中に着実に増えた。就任前年の1906（明治39）年の学生数492名であったが、就任8年後の1915（大正4）年には1,549人とほぼ3倍程度に増えている。財産や学校経費も約3倍となっている（『同志社百年史』通史編1 p.767.）。

### （3）国際主義の始動

原田は、著名な人々をゲストスピーカーとして内外から頻繁に招聘し、「科外講演」を頻繁に開催し、学生たちに知的刺激を与えた。このことで、教学の幅が広められ、同志社の国際主義が始動した（『同志社百年史』通史編1、p.744、pp.768-780.）。

自らも、積極的にエネルギーに海外に出向いた。1910（明治43）年4月～1911（明治44）年2月まで、海外に長期出張した。往路、アメリカに向かう前にシベリヤを経てモスクワを訪問し、最晩年のトルストイと面会した。その後ベルリンを経てエディンバラに向かった。エディンバラでの国際宣教会議に参加し、2回の講演を行った。この時、エディンバラ大学から、LL. D（法学博士）名誉学位を受領している。その後アメリカに渡り、ハートフォード大学にてラムソン講演（8回）を行い、イエール大学、ハーバード大学、アーモスト大学、シカゴ大学等で講演を行った。この時アーモスト大学から神学博士の名誉学位を授与されている。この講演旅行中、ジェームス財団から10万ドルもの寄附を受けている。

## 2-3. 同志社総長原田助への批判と辞任

学外を飛び回り、校務をおろそかにしている、宗教教育が低迷している等の批判が学内から噴出した。1919年に辞任に至る。その経緯は、以下に詳しい。同志社少壮校友團委員[編].1918年、『大正六七年同志社紛擾顛末』（タイショウ ロク シチネン ドウシシャ フンジョウ テンマツ）。

その後、原田はかねてから交流があったハワイ大学に招聘され、1921年1月赴任した。日本語・日本歴史、日本文学の講座を開設し、講義を担当し、ハワイ大学の日本学の発展に大いに寄与した。健康上の理由で原田は家族とともに1932年10月に帰国するが、同年9月にハワイ大学は新学期の開校式において12年間にわたる原田の貢献、具体的には、何千人もの西洋人に東洋についての真の知識を分け与えたことを称え、法学博士の名誉学位を授与している。

原田の愛息・健は、平和主義者原田の意志を継いで、国際連盟の事務局に勤務している。

## 3. 海老名弾正（第8代総長：1920年～1929年）と同志社

### 3-1. 海老名弾正の生い立ちと同志社総長就任前の経歴

海老名弾正（1856・安政3年～1937・昭和12年）は、筑後柳河藩士の子に生まれた。1872（明治5）年、熊本洋学校に入学した。ジェーンズの厳しい指導を受け、キリスト教を信じるに至った。1876（明治9）年1月30日、花岡山での「奉教趣意書」に署名、同年ジェーンズから洗礼を授かった。同志社英学校に1876（明治9）年入学。当初は同志社英学校の未整備な状況に不満であり、新島襄に極めて批判的であったが、徐々に二人の関係は良好なもの

となった。海老名弾正ら、熊本バンドによる改革案のほとんどを新島が取り入れたからであった。1879年（明治12）同志社卒業後、新島の郷里である群馬の安中教会の牧師に抜擢されるなど、新島の海老名への信頼は絶大であった。その後日本基督伝道会社社長、神戸教会牧師（1893（明治26）—1897（明治30）、本郷教会牧師（1897（明治30）—1920（大正9））を歴任し、同志社大学の第8代目総長となった（1920（大正9）—1929（昭和4）年）。

本郷教会では、彼の説教を聞こうとして多くの東京大学生を含む多くの青年たちが教会に足を運んだ。海老名は雄弁家で、多くの青年の心をつかむ才覚があった。

海老名は万人に普遍的な宗教的意識を究極的に完成したものをキリスト教とし、儒教や神道との等質性、類比性を求めた。そのため、キリストを神の啓示とし、その固有の神性を擁護した植村正久と論争を展開した。『新人』誌がその議論の場を提供した。

また日露戦争を人道のための戦いと位置づけ、日本組合教会の朝鮮伝道（1911—1921）を、朝鮮民族が帝国臣民となって世界に雄飛する方法として推進した。同時に、宗教的意識の普遍性のゆえに、それを備えた人間の価値を唱え、大正デモクラシーの首唱者・吉野作造や社会的基督教の指導者・中島重（しげる）などに著しい感化を与えた。（出典：土肥昭夫（2014）平凡社『改訂新版 世界大百科事典』）

### 3-2. 海老名弾正の同志社への功績

1920年（大正9年）第8代同志社総長となる。その年、大学令による同志社大学の開講（文学部、法学部、大学院、予科）が実現した。中でも法学部の充実が特筆できる。本郷教会時代に知己を得た『新人』誌の寄稿者たちの中から、法学部に教員として招聘された者が何人かいる。中島重、今中次磨、山本亀市、古屋美貞、住谷悦治などである（和田洋一編、1965、138）。

さらに、海老名は原田が始動した「国際主義」を継承しようと努力した。原田総長時代に開始された「科外講演」も頻繁に開催された。

さらに、海老名は、「同志社の使命は矢張り日本をして世界奉仕の大使命を自覚しむるにありと思う。…同志社に国際的思想の如き団体が結ばれ、大いに国際的精神と思想を鼓吹し…」（「総長より学生へ」『同志社時報』大正13・4）と述べて学生たちを鼓舞した。海老名総長の期待に応えるべく、校友であり外交官でもあった原田健（原田助の息子）の講演に刺激された学生たち（法学部の学生が中心）が、国際連盟協会同志社大学学生支部を1924（大正13）年に結成している。支部長は中島重、顧問に海老名が名を連ねている。国際連盟協会同志社大学学生支部は、早稲田大、東京帝大に次ぐ日本における3つ目の学生支部であった。彼らは、他の大学における支部設立を助けていった。（和田洋一 1965、138-139）。以上のように海老名総長時代の同志社は、国際主義という面でも飛躍し続けた。

2年後の1922（大正11）年には、制度としての男女共学を実現した。

### 3-3. 海老名弾正の日本社会への影響

海老名は大正デモクラシーの中心人物であり民本主義を唱えた吉野作造、そして社会的基督教の指導者・中島重らに大きな影響を与えた点で、貢献は大であろう。

### 3-4. 小崎弘道、徳富蘇峰ら熊本バンドの働き

(1) 小崎弘道：同志社英学校在学中に彦根伝道に加わり、明治12年(1879年)6月に同志社を卒業後、新島と共に日向伝道を行った。明治12年(1879年)10月、上京し、組合派の新肴町教会を設立、12月に按手礼を受けた。明治13年(1880年)3月には植村正久、井深梶之助らとともに東京キリスト教青年会(YMCA)を創設し、初代会長に就任。同年10月キリスト教をはじめとした思想一般、および社会問題も取り扱った青年会機関誌『六合雑誌』を創刊した。明治16年(1883年)には週刊新聞『基督教新聞』を刊行した。植村正久らとともに警醒社を設立し、明治19年(1886年)6月に『政教新論』という本を刊行した。同書は、従来の宗教としての儒教に代って、新しい時代の日本におけるキリスト教の重要性を説いたものであった。同年、赤坂霊南坂教会と番町教会を設立した。

(2) 徳富蘇峰：熊本洋学校に学び、同志社英学校に移るが中途退学した。熊本に戻り大江義塾を設立。『将来之日本』(1886)で好評を得て上京、民友社を創設。『国民之友』『国民新聞』を発刊し平民主義を唱えた。その後国権主義へと転換し、明治30(1897)年松方内閣の内務省勅任参事官に就任、桂内閣にも深く関与した。昭和4(1929)年国民新聞社を退き大阪毎日新聞の社賓となる。17年日本文学報国会・大日本言論報国会会長、18年文化勲章。敗戦後A級戦犯容疑者に指名され公職追放。27年『近世日本国民史』100巻を完成させた。

(<https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/298/> 2024-9-16 アクセス)

### むすび

日本社会は明治末期、大正時代そして昭和初期にかけて「大正デモクラシー」の時代を迎えた。本稿では、当時の時代背景を視野に入れつつ1912(明治45/大正元)年以降18年間の同志社の動向について議論した。新島の宿志であった同志社大学が実現した画期的な時代でもあった。総長たちの強力なリーダーシップにより国際主義も開花し、男女共学が制度として整備された。本稿では同志社が大正デモクラシーの運動に対し、どのように関与し、影響を与えたかについても考察を加えた。

### 参考文献

太田雅夫(1998)「原田助とハワイ大学」『キリスト教社会問題研究』46号、pp.179-229.  
学校法人同志社(1979)『同志社百年史』通史編1。

關岡一成(2022)『吉野作造と海老名弾正 -吉野が「海老名門下のクリスチャン」とされる理由-』教文館。

竹中正夫(1987)「同志社人物誌(60)原田助」『同志社時報』第83号。pp.90-101.

同志社少壯校友團委員[編]。(1918)、『大正六七年同志社紛擾顛末』

原田健(1971)『原田助遺集』

和田洋一編(1965)『同志社の思想家たち』同志社大学生協出版部